第十四講　物語・小説の読解②

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

> 高校二年生の加納碧李（かのうあおい）は陸上部の選手として、監督の箕月（みつき）、マネージャーの杏子（きょうこ）と信哉（のぶや）が見守る中、五月の記録会に出場する。

　去年の秋、味わった敗北は、碧李の内に深く刻まれ、時折、疼（うず）く。県営競技場での試合、最下位でゴールした。いや、成績や順位ではない。それはそれで無残な数字ではあったけれど、数字に負けたわけではないのだ。あの試合以後、走ることそのものに怯（おび）え、背を向けた。自分にも周りにも言い訳をし、誤魔化（ごまか）し、遠ざかろうとした。それこそが敗北だ。碧李は敗北の正体に気がついてしまった。①気がつけば、見据（みす）えるしかない。

　スタートラインに十六人の選手が並ぶ。一人一人の名前と校名が放送され、その度に拍手が起こる。最後の選手の紹介が終わり、一瞬、静寂が訪れる。スタート。選手たちは一つの塊になり、走り出す。

「どうだ?」「どう?」

　箕月と杏子の声が重なった。碧李のラップ・タイムを尋ねているのだ。信哉は黙って、ストップウオッチを差し出した。

「69・01……。この数字は、明らかに飛ばしすぎでしょ」

「……ですね」
首肯(注)する。

この数ヶ月、碧李のラップ・タイムが七十秒を切ったことは一度もなかった。何度か箕月に指示を仰いだが、「好きに走らせろ」ほとんどその一言で片づけてしまう。いいのかな、このままで……。ふっと思い、焦る。焦ろうとしない監督が歯痒くもあった。箕月の言葉は決して的外れではないけれど、曖昧で抽象的で指導の域には入らない。今、加納に必要なのはもっと具体的なコーチじゃないんですか。はっきり言葉にしてみようか。箕月なら、真剣な言葉にきちんと耳を傾けてくれるはずだ。どうしようか。②思いあぐねもしたけれど、信哉は結局、何も口に出さなかった。遠慮したわけではない。箕月が指導者としての資質に溢れていることは、選手としてもマネージャーとしても十分、感じ取っている。その監督が好きに走らせろと言うのなら、好きに走ったその先に、信哉には見えない光が灯っているのかもしれないと、考えたのだ。

このまま、潰れちまうわけがない。練習の後、暮れなずむグラウンドで、口元を引き締め俯いていた横顔を幾度も目にした。頬に汗の跡を残した顔は、「もう、だめだ」「苦しい」「おれは、ここまでかもしれない」そんな、弱音や苦悶(注)の滲んだ一言より何倍も雄弁に、ランナーの焦燥を語っていた。荷を下ろせたから走るのではなく、背負ったままでも走る。碧李の決意を信哉は見事だと思う。ランナーとはそういうものなのだと、思い知らされる。

二周目、ラップ・タイム、68・03。
「このままだと、ゴールまでもたないんじゃないですか」
碧李はペースを完全に見失い、引きずられている。昨年と同じだ。同じことがまた、繰り返される。何も言わない箕月に、杏子が苛立つ。
「③おまえら、何を見てるんだ」
「え? 何をって……加納くんに決まってるじゃないですか」
「いつの加納だ?」

杏子が息を詰める。箕月の一言が理解できない。

「おまえらの見ているのは、今の加納じゃない。去年、途中でへたれた加納碧李だ。去年の結果を引きずっているのは、加納じゃなくておまえたちじゃないか。引きずったままだから、今が見えないんだ。しっかり目を開けて、今の加納を見てみろ」

その一言に押され、視線を向ける。④あぁと声をあげそうになった。

「どうだ?」

箕月が問うてくる。口元がほんの少しだが綻（ほころ）んでいた。

久々に、碧李の走りを見た。最初に目にしたのは、陸上部に入部した日、初めて部活動に参加したときだった。一年生はまだ、競技パートに分かれての練習はなく、ひたすらグラウンドを走っていた。そのとき、十人ほどいた集団の中で、碧李の走りは群を抜いて美しかったのだ。それは抑制の美しさだった。優れた舞踏家のように身体の隅々まで抑制が利（き）いている。抑制により蓄えられた余力が持久力となり、何周走ってもフォームは乱れなかった。

あの走りだ。春たけなわのグラウンドで、初めて目にしたときのあの走りだ。いや、ちがう。強くなっている。背は高いが、その背に見合っただけの筋肉も骨格もまだ十分でなかった一年生のときより、ずっと強く、たくましくなっている。

（あさのあつこ「スパイクス　ランナー」より）

(注)　首肯＝うなずくこと。
　　　苦悶＝苦しみもだえること。

1　――線部①の碧李の決意が信哉の視点からとらえ直されている一文を抜き出し、その最初の五字を書け。

2　次の文は、――線部②で信哉が何も口に出さなかった理由を説明したものである。[Ⅰ]・[Ⅱ]に入る最も適当な七字の言葉を、それぞれ本文中から抜き出して書け。

碧李に対して[Ⅰ]が必要だと思っていたが、[Ⅱ]という箕月の言葉の先にある可能性を信じてみようと考えたから。

Ⅰ □□□□□□□
Ⅱ □□□□□□□

3　――線部③「おまえら、何を見てるんだ」という言葉で箕月が二人に伝えようとしたことは何か、三十字以内で書け。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

4　――線部④「あぁと声をあげそうになった」とあるが、その後、二人が見たのは碧李のどのような走りだったのか、三十五字以内で書け。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

5　本文の表現の特徴として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア　時間の順序に従った描写や感情を抑制した表現をすることによって、登場人物の心情や行動を客観的に描き出している。

イ　過去と現在の場面を巧みに重ねることによって、これまでの経緯を浮き彫りにし、物語の展開に奥行きをもたせている。

ウ　比喩(ひゆ)を用いて人物の性格や行動を誇張することによって、深刻で重くなりがちな場面にユーモラスな雰囲気が加えられている。

エ　擬態語や擬音語を数多く用いることによって、登場人物の心情が感覚的に表現され、場面全体に躍動感が生まれている。

□

【鹿児島県】

二

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

「その投げ方じゃ、だめだな。」

いきなり背後から聞こえた声に、純也（じゅんや）はびっくりして、ボールを投げようと振り上げていた手を思わず止めた。

振り返ると、伊予灘（いよなだ）の方角に沈もうとしていた夕陽（ゆうひ）が目に飛び込んで、相手が黒い影にしか見えなかった。草叢（くさむら）に立つ自分より背の高い影が、また声を上げた。

「その投げ方じゃ、カーブは曲がらないぞ。」

純也は夕陽にグローブをかざし、相手の顔を見た。てっきり年長の男児だ、と思っていた影が、スカートを穿（は）いているのに気付き、よけいにびっくりした。

両手を威張ったように腰に当て、仁王立ちしている恰好（かっこう）は、スカートを穿いていなければ、年長の男児にしか見えない。このあたりでは見かけない顔だった。

(1)「何だ？　おまえは……。」

純也は驚かされたことに腹が立って、ぶっきら棒に言った。

「だから、その投げ方じゃ、カーブは投げられないって言ってるんだ。」

相手も怒ったように言い返した。

純也はたじろいだ。しかしすぐに相手が自分とそう年が変わらない少女だということに気付いて、

「放っとけ。」

と怒鳴り返した。

純也はボールを投げていた廃工場の壁にむき直って、左足を上げ右腕を背後に引いた。投げようとした瞬間、

「だめだって、それじゃ。」

と相手が大声を出し、純也の指先を離れたボールはとんでもない方向に転がってしまった。

ハッハハハ、相手が笑った。純也は頭にきて少女を睨(にら)み付けた。

「おまえ、うるさいんだよ。あっちへ行け。」

それでも少女は白い歯を覗(のぞ)かせて、笑っている。純也は舌打ちをして、ボールが消えていった草叢の方に走り出した。ボールを拾い、マウンド代(がわ)りにしていた場所に戻ろうとすると、少女はまだそこに立っていた。純也は相手を無視することに決めた。

純也は壁にむかってボールを投げた。力んで投げてみるのだが、上級生の投手が投げるようにカーブが上手(うま)く投げられなかった。同じ歳(とし)の少年の中では、純也は一番速い球を投げることができると自負していたし、ストライクを何球も続けて放ることができた。来春、三年生になれば、町内の年少組の野球部に入れる。そこで純也はピッチャーをやりたかった。しかし少女が言ったように、カーブが上手く曲がらない。

――うん？

純也は投げるのを止(や)めて、首をかしげた。

――なぜ、あいつ、俺がカーブを投げる練習をしとるのがわかったんだ？

純也は少女の方を振りむいた。少女は同じ姿勢で立っていた。

「あのさ、その握り方じゃ、ボールは曲がらないんだよ。」

――握り？　何を言ってるんだ、こいつ……。

(2)<u>純也は眉を上下して、少女を見直した。</u>

聞き慣れない言葉遣いもそうだが、相手の言い方にはどこか自分を馬鹿にしているような感じがあった。

「じゃ、おまえがカーブを投げられるんなら、投げてみろや。」

純也が言うと、少女は、いいよ、と平然とした顔で歩み寄り、純也の手からボールを取り、壁にむかって背筋を伸ばして立ち、ボールを握った左腕を二度ぐるぐると回転させた。

――サウスポーか……。

純也が胸の中でつぶやいた時、少女は右足をゆっくりと上げ、右手を前に突き出し、左手を大きく上げて一気に振りおろした。ボールは壁の手前でブレーキがかかったようにカーブし、純也が壁にチョークで描いていたストライクゾーンの真ん中に当たり、ポンという乾いた音を立てた。

(3)純也は口を半開きにして、壁と少女を交互に見た。ボールもよく曲がったが、それ以上に少女の投げたボールには迫力があった。

――な、なんだ、こいつは……。

少女は少し不満そうな顔をして、首をかしげていたが、純也を見てにこりと笑った。そうして草叢に入り、ボールを拾って戻ってくると、ボールを握った手を純也に見せた。

「ほら、人さし指と中指をこうやって少し外にずらすんだ。やってみな。」

純也は少女が握って見せたやり方で、ボールを握ってみた。

「違うよ。もう少し外にずらすんだ。」

純也が指をずらすと、ボールが手からこぼれ落ちた。少女はボールを拾って純也に渡し、ぎこちなくボールを握っている純也の指の上から彼女の指を覆い被(かぶ)せるようにした。温かい手だった。

「ほら、こうだよ。親指もしっかり握ってないとだめだ。ちいさい手だな……。でも毎日練習すれば握れるようになるよ。」

そう言われて少女の手を見ると、純也よりひと回り大きかった。

「こうしてごらん。」

少女は言って、左手の人さし指と親指の腹を合わせて、パチンと音を立てた。純也は右手の指で同じようにしたが、音など出なかった。

「ボールを放す時、この感じで放すんだ。すぐにできなくても、きっとできるよ。」

そう言って少女は左手を振りおろしながら指で音を立てた。

「はあ……。」

(4)いつの間にか少女にうなずいている自分に気付いて、純也は唇を嚙(か)んだ。

「おまえ、どこの誰や?」

純也が言って顔を上げると、少女はもう草叢のむこうまで走り出していて、頑張れよ、と男のような言葉を残して立ち去った。

「チェッ、何が頑張れじゃ。」

純也は舌打ちし、右手の人さし指と親指を鳴らそうとしたが、何も音はしなかった。

(5)<u>周囲を見ると、すでに陽は落ちて晩秋の薄闇が原っぱにひろがろうとしていた。</u>

「あっ、いけねぇや。」

純也は言って、あわてて走り出した。

（伊集院　静「どんまい」〈「ぼくのボールが君に届けば」所収〉より）

Step 2

〔問1〕 (1)<u>「何だ?　おまえは……。」</u>とあるが、このときの純也の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　自信があるカーブの投げ方を否定されたことに不快を感じ、親しげに話しかける少女の態度に反感を覚えている。

イ　少女から怒りをあらわにして声をかけられたことで恐れを感じ、どう答えてよいか分からずにとまどいを覚えている。

ウ　見ず知らずの少女から不意に声をかけられたことで動転するとともに、自分が驚かされたことに怒りを覚えている。

エ　自分の投げ方をからかわれたことにいきどおるとともに、いつまでもしつこく冷やかしてくる少女に困惑を覚えている。

Step 2

〔問2〕 (2)純也は眉を上下して、少女を見直した。とあるが、純也が「眉を上下して、少女を見直した」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア カーブを投げられないわけを丁寧に指摘しながらも、馬鹿にするかのような態度を取る少女の気持ちをはかりかね、不安に思ったから。

イ カーブの練習をしていることを見抜くとともに、自分の理解できないことを言う少女が、どのような人物かを確かめたいと思ったから。

ウ 学年で一番速いボールを投げられることに誇りをもっている自分を少女がけなしてくるので、絶対に見返してやろうと思ったから。

エ 少女がカーブの投げ方を教えてくれたことに驚き、初対面の自分に対して親切に接してくれているのはなぜかと不審に思ったから。

□

Step 3

〔問3〕 (3)純也は口を半開きにして、壁と少女を交互に見た。とあるが、この表現から読み取れる純也の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 目の前にいる少女が自分を圧倒するほどのボールを投げたということが信じられず、何が起きたのかを確かめようとしている様子。

イ 見事なカーブを投げた少女が実力をひけらかすような表情を見せたことに驚いて、どうしたらよいか分からずにあきれている様子。

ウ　ボールがあまりにも大きく曲がったことをおかしいと思い、少女が何か巧妙な手段を使って投げたのではないかと疑っている様子。

エ　少女の投げたボールが自分の投げるボールとは比べものにならないほど速かったことに慌ててしまい、ひどく取り乱している様子。

Step 3

〔問４〕 (4) いつの間にか少女にうなずいている自分に気付いて、純也は唇を噛(か)んだ。とあるが、このときの純也の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　カーブの投げ方を少女から細かく教えてもらっているにもかかわらず、上手に投げられないことに情けなさを覚え、悲しく思っている。

イ　少女の言うとおりにいくら練習しても、カーブを投げられるようにならないのではないかというあせりを覚え、心もとなく思っている。

ウ　初めて出会ったのに熱心に教えてくれる少女への感謝を、うまく言葉で伝えられない自分にもどかしさを覚え、腹立たしく思っている。

エ　知らず知らずのうちに少女の実力を認めさせられ、反発しつつも結局は素直に従っている自分にふがいなさを覚え、悔しく思っている。

Step 3

〔問5〕 (5)周囲を見ると、すでに陽は落ちて晩秋の薄闇が原っぱにひろがろうとしていた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　純也が少女からカーブの投げ方を教わった瞬間の情景を、晩秋の夕暮れの鮮やかな色彩に着目して絵画的に表現している。
イ　カーブを投げる練習に没頭していた純也が我に返る瞬間を、晩秋の日没の情景に重ね合わせて印象的に表現している。
ウ　指を鳴らそうと思ってもできなかった純也が失望した瞬間を、闇が広がっていく晩秋の情景によって象徴的に表現している。
エ　少女の実力に驚かされた純也の動揺と晩秋の夕陽が沈んでいく瞬間とを、巧みに描き分けて対照的に表現している。

□

【東京都】

第十四講　物語・小説の読解②

Step 1

一

解答

1、荷を下ろせ　2、Ⅰ、具体的なコーチ　Ⅱ、好きに走らせろ　3、去年の結果を引きずらないで、今の加納の姿を見ろということ。（29字）（同意可）　4、抑制の利いた美しさに加えて、強さやたくましさまでもが備わった走り。（33字）（同意可）　5、イ

解説

1、「この数ヶ月…」以降が、信哉の視点から書かれた文章となっている。苦しい状況での「碧李の決意」について、信哉は「見事だ」と感じている。

2、Ⅰ、「今、加納に必要なのは…じゃないんですか」と言おうか迷っている。Ⅱ、「その監督が…信哉には見えない光が灯っているのかもしれない」と考えるようになっている。

3、「おまえらの見ているのは、今の加納じゃない」「去年の結果を引きずっているのは…おまえたちじゃないか」「しっかり目を開けて、今の加納を見てみろ」と言っている。

4、「久々に、碧李の走りを見た」と思い感動している。さらに、入部した日の「抑制の美しさ」に加えて、「一年生のときより、ずっと強く、たくましくなっている」ということに気づいている。

5、去年の秋、現在、一年生の春という異なる時期での碧李の走りや思い、まわりの者の思いを描くことで、碧李の成長が伝わる文章である。

Step 2・3

二

解答

〔問1〕ウ　〔問2〕イ　〔問3〕ア　〔問4〕エ　〔問5〕イ

解説

〔問1〕「いきなり背後から聞こえた声」に「びっくり」したこと、声をかけてきた相手が「スカートを穿いているのに気付き、よけいにびっくりした」ことなどから、「驚かされたことに腹が立って」いると考える。

〔問2〕「なぜ、あいつ、俺がカーブを…わかったんだ?」と疑問に思い、さらにボールの握り方がまちがっていると言われたことが理解できなくて、とまどいながら少女を注視する気持ちを考える。

〔問3〕「口を半開きにして」は、驚いてあっけにとられる様子を表している。「ボールもよく曲がったが、それ以上…迫力があった」ことに驚き、ぽかんとしていることをおさえる。

〔問4〕「唇を噛む」は、悔しさを表す動作。よく曲がり迫力のあるカーブを目の前で見せられ、ボールの握り方を教わって、「はあ」と「うなずいて」しまったことへの悔しさを感じている。

〔問5〕見知らぬ少女からカーブの投げ方を教わるうちに、いつのまにか時間が過ぎていたことに気づいた場面である。